

やしお

栃木県ホームヘルパー協議会
ヘルパー通信第45号
令和元年5月31日発行

◆事務局/
とちぎソーシャルケアサービス共同事務所
◆発行人/仁平明美
TEL.028(600)1725・FAX.028(600)1730

会長挨拶

「やしお」に向けて

栃木県ホームヘルパー協議会会長

仁平明美

会の活動は、研修会を定期的に開催できるように、やつとスタートラインに立てた気がする。

現場のヘルパーが困ったとき、何時訪ねても誰かが相談に乗ってくれ、他に繋いで解決の道を探るお手伝いをしてくれる、ヘルパーにそんな「場」が有って良いのではないかと考えると、五つの専門職団体の共同事務所がそんな「場」になると信じ活動を続け原動力と成っていました。しかし、資質の向上と言う目標となると、多くの難点が有りました。役員がそれぞれが仕事を持ち、遠くの地区に住む体制の中での、活動は思うように進まないし、後継者を見つめることも儘ならない、さらに研修内容の選択の難しさは勿論、日程の調整、当日の参加者人数も

読めない等々、開催には多くの不安が常に有ったのです。しかし、ノーマライゼーション研究会の方と繋がる事が出来、それらが一挙に解決した感がありホッとしています。「福祉用具を利用した介護技術」とし、七回の研修会を開催することとなりました。その中の一回は研究会の会員である理学療法士の指導も受けられる運びとなってます。人数に関係なく定期的に開催し、気楽に助言が受けられる時間も設定し個別の問題にも触れていけることを目指した研修会を開くことが出来るようになりました。それだけでなく、同じ場所定期的に研修を開催できるというのは大きなメリットが生まれます。そこが常に気軽に助言が求められる「場」になっていくと言

うことでもあるのです。「繋がり」の中で助言が受けられると言うことは心強いことではないでしょうか。私自身を振り返っても、多くの「繋がり」の中で壁を乗り越えてきたと言え多くの人に助けられ、今も有ると言えるのです。会員の皆様にもそんな「繋がり」を得て欲しいと願っています。当協議会もその一つに成りたいと願ってきたのですが、繋がりは一つでも多い方がいいのです。知識・技術の習得と言う学びは業務



に欠かせないし、活動地区での連携もあるでしょう、しかし、その他の人間関係は活動や生きる意欲・気力の継続に欠かせないものと私は考えます。多くの他機関、多くの人へ繋がる「場」も学びとともに提供できるのが当協議会の役割と考えています。会員の皆様にとっても、共同事務所・ノーマライゼーション研究会での研修が人に繋がる「場」に成っていく、そう有って欲しいと願っています。

その他医療ケアに関する研究も調整中です、これも他機関との繋がりの中で実現出来るものです。ヘルパーは多くの場合一人で行う業務で何かと不安の多い仕事では有るのですが、業務を通し多くの人に出会い、個人の生き方そのものまで変わり得る仕事であると感じ活動を続けていってくださいます。

伝えたいことが儘ならない稚拙な文章をお詫びし、会長あいさつとさせていただきます。



在宅支援で大切な事

支援センターすぎのこ

森 毅

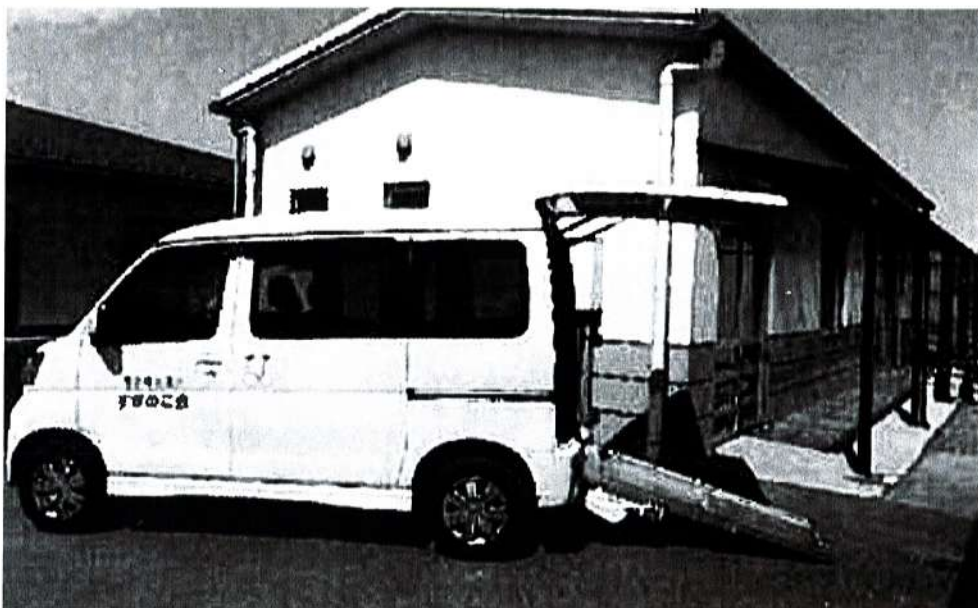
当事業所「社会福祉法人すぎのこ会 支援センターすぎのこ」（本部 栃木市岩舟町鷲巣）は、栃木市大平町のぶどう団地にあります。目の前には太平山があり四季折々に姿を楽しませてくれます。

当事業所では、訪問介護・居宅介護を行っています。特に居宅介護サービスでは、行動支援、同行支援、重度訪問介護、移動支援事業、福祉有償運送と幅広く、多様な障がい特性や個人に合わせた支援の提供を行っています。

また、当事業所に併設されている「相談センターすぎのこ」及び「ケアプランすぎのこ」には、それぞれ相談支援専門員、ケアマネージャーが配置されており、利用者の情報の共有や変化にも迅速に対応できる利点があります。利用者の状態の変化や生活の変化、地域との関係性等にヘルパーが気づき、連携を行う事で利用者へ適切な支援を考え提供しています。

現在行っている業務での役割を考えた時

に、自立支援（その人がその人らしく、生きがいを持てるように）と、本人や家族の負担軽減（家族支援のフォロー、生活面の向上）、信頼関係構築と心のケア（1対1の支援を基本とし、利用者に寄り添い、ヘルパーが少しでも心の支えと感じてほしい）が、私たちが目指している支援のあり



方と考えています。

また、利用者一人一人の状態や障がい特性を理解し、家族状況や地域での役割など様々な視点を踏まえる事で、質の高いサービスの提供につながると考えます。

1対1で難しい場面や柔軟に対応しなくてはならない場面が多く、個別の専門性の高い支援を求められ、時には悩みを抱えてしまう事もありますが、「そこに待っている方がいる」という使命感を忘れずに向き合っていきたいと思えます。

介護するじつ、わかるじつ

NPO法人
とちぎノーモライゼーション研究会

伊沢 和子

「ありがとうございます」サービスが終わるとそう声をかけて、利用者さんの家を後にすることが日常の仕事終わり。これは訪問介護従事者だけではなく、介護という仕事に関わる訪問介護、訪問リハビリ、ケアマネージャー等々の皆がそうしていることでしょう。

私もその日いつものように、「ありがとうございますました」と頭を下げて挨拶をしたのですが、利用者の方から「こちらこそ、

ありがとうございます」と返事が返ってきたのです。

「こちらこそ」・・・こちらと同じ気持ちですという心を表現する言葉。

自分の気持ちの「ありがとうございます」を相手の方がどう受け取ったのかと考えたら、その「ありがとうございます」に同じように感謝していませんということであるのなら、私はもつともっと感謝をこめた仕事をしなければいけないのではないかと思わずにはいられなくなりました。

感情を隠すことが出来ず、時間に追われている姿があらさまだったり、ちょっと嫌な気持ちや表情に出てしまったりすることはありませんか？そんな時、相手の方はどんなふうに今日の自分を受け止めていた



のだろうと思うと、申し訳なかったという気持ちでいっぱいになります。皆さんはどうでしょう？

自分の確認や観察力の足りなさが、利用者の方に大きな影響を与えてしまったと感じたことはありませんか？

誰もが完璧などということはありません。しかし介護の基本は自分が介護された時にどうされたら心地よい生活が送れるのか、ということに尽きるのではないのでしょうか。介護することの真意は介護されることなのではないのかと思います。落ち着いた気持ちで一日の仕事を振り返ることを忘れず、利用者さんからもらった「ありがとうございます」「こちらこそ」と返せる仕事を、皆で繋いでいきたいものです。

「介護と研修」

大島 仁美

祖母は6年前、癌と診断されました。入院中に余命数カ月との宣告を受けました。最期の時間をどのように過ごしたらよいのか家族皆で話し合いました。そして、祖母の一番の願いである「家に帰りたい」との願いを叶えることになりました。自宅に戻

り、家族全員で協力し合い介護すると共に、様々な居宅サービスを利用しました。

居宅サービスを受けた中で、訪問介護員さんの存在が最も印象に残っています。祖母に心から寄り添い、プロ意識を持ち、誠実に介護に臨まれる姿勢に感銘を受けました。訪問介護員さんの存在は祖母にとっても大きな存在であり、心の支えでした。

祖母が他界した後、お世話になったことへの感謝の気持ちをお伝えするため事業所を訪問しました。その際、訪問介護員さんお一人おひとりが介護を提供することに喜びを感じ日々研鑽を重ねておられることを知りました。事業所内での学習会や外部でのセミナー等積極的に参加されているとのことでした。また、利用者から学ぶ姿勢も大切にされているとのことでした。

「ケアとは人の成長を引き出すこと」を意味します。そしてまた、「ケアする者も成長する」とも言われています。利用者サービスを提供する過程で様々な困難に直面します。その際、困難へ真摯に向き合い、解決しようとする姿勢が専門家としての成長につながると思います。専門家として成長するためには、学ぶ意欲を持ち続けることが不可欠です。その上で、幅広い知識と教養を身につけるため積極的に研修等

へ参加することも非常に重要なことです。それは介護者としての視野の広がりにもつながります

介護とは、利用者の命を最大限に輝かせることのできる尊い職業です。だからこそ、誇りを持ち専門家としての役割を果たすことが大切であると思います。そのためにも自己研鑽を重ねていくことが求められるのではないのでしょうか。

私自身も介護の専門家として成長できるように生涯学び続けていきたいと思っています。



編集後記

この広報が皆様のお手元に届く頃は改元された後の、「令和」となっているでしょう。心機一転の方も、今までどおりの安定の方にも「平成」は過去となり、思い出の一つとして語られます。

平成四年に採用され、二十六年間ヘルパーとして働かれ、六十歳の定年で再雇用を選んだ方は、現場に出て働くよう上司から告げられた。登録ヘルパーでは事業に支障をきたしてしまうとの事。その方の後の人材育成がうまくいかない様子。どこも、ヘルパー募集を出しても、誰も来ない現状。世間も人手不足の深刻さで、パートやバイトでの時給の上昇や最低賃金の底上げをしているが、若い人達はどこに居るのでしよう。

正社員として働けたことは、辛い事もあったでしょうが幸運として、「平成」を駆け抜けたことをお互いに労い、これからもめげずに、頑張りましょう。三月三十一日にはヘルパーの先輩達との会食に参加し思い出話に花が咲きました。みんなは、あの時はいろいろ大変なことがいっぱいなのに、いつも、げらげらと笑い転げて、楽しかったと、七十代、八十代、六十代の仲間は懐かしがるのです。

会報担当 関口久美子